

「中心と周辺」を巡る諸問題

——人間活動の地球上の不平等——

宮下史明

1. はじめに
2. 中心地とは
 - 2-1. 中心地の成立
 - 2-2. 中心と周辺 ——中心地の種類——
3. 大航海時代 ——ヨーロッパ列強といわゆる周辺諸国との接触——
4. 人間不平等の拡大 ——熱帯有用作物の伝播——
 - 4-1. カカオ・ビジネス（歴史）
 - 4-2. カカオ・ビジネス（栽培）
5. コーヒー・ビジネス
6. フェア・トレードへの道
 - 6-1. フェア・トレード ——コーヒーの事例——
 - 6-2. フェア・トレードは果たして貧困問題を解決できるか

1. はじめに

地理学、その学問分野の一つである経済地理学は非常に範囲の広い学問である。一言で言えば地球上における人類の分布、その活動のすべてを取り扱う空間的学問であると言っても過言ではない。その理論も地理学、経済学の両方の理論を基礎としている。そして単なる地理現象・実態を記述するだけでなく、時にはその研究者の世界観に裏づけられたあるべき将来の姿まで言及している

学問である。

2010年春学期に、商学部に「文明の衝突を超えて」というオムニバス形式の講座を置いた。その講師の多くは本記念論文集の執筆者であった。宗教学、哲学、経営学、商学などの学内外の専門家がそれぞれの立場から、西洋哲学、キリスト教、イスラム教、世界の現状などを論じた。筆者は経済地理学の立場からこの講座に参加した。本論文はの中で考えた文明論的視点も加えた我々人類の今日までに至る不平等の根源を探ろうとする幅広い視点の論文である。

人類の長い歴史の中で戦争や飢饉、流行病は常に発生し、宗教も必ずしも人種、国家間の争いを防ぐものにはならず、時にはそれを助長するような役割すら果たしてきたこともあった。我々の願う世界人類の平和、人間生活の平等はいつまでたっても実現できないのだろうか。人々が欲望をもう少し抑えていくことが出来れば、また国家、社会がより自省して、他人のものを盗らない、他国の領土を取らないなどの最低限のことを守っていけば、この問題は少しは改善される方向に向かっていくだろう。最終講義に当って、筆者がこれまで研究してきた経済地理学の個々の細かい分野ではなく、地理学、経済地理学とは何かという原点に立って、幅広く論を進めていきたい。

2. 中心地とは

2-1. 中心地の成立

我々人類は地球上の様々な地域でこれまで生活してきた。そしてそこにおいて、農業、漁業、林業、狩猟業、鉱業、工業、商業、サービス業など様々な経済活動を行ってきた。それらの形態や規模は世界中で一様ではない。それは地表の形態、気候、土地の肥沃度などの自然条件が同一ではなく、また文化や歴史、言語、宗教などの社会環境も同じではないからである。さらに重要なことは、そこに居住している人々の人口が異なり、また人種的にも異なる場合も少なくないからである。中心（中核地域）は、人口、政治、経済、産業、技術、

富、文化、学術などの様々な集積（agglomeration）によって成立する。中心地がさらに拡大していくと、ヨーロッパのように世界の中核地域となる。

人類の先祖はアフリカで生れたと考えられている。狩猟生活の場合には、獲物が一年中豊富であれば採取と合わせてそこに定住することも可能であった。しかし気候変動などにより獲物が少なくなれば、それを求めて移動・移住せざるを得なかった。それは動物自体も食べ物を求めて移動しているからである。農耕生活をしていれば、ある場所に定住することも可能であった。人類の歴史は豊かな土地を求めての長い移動の歴史であったと言える。あるものは極北の地で、今日まで狩猟やトナカイなどの遊牧生活している。またあるものは、アジアから氷河期に今日のベーリング海峡を、当時は陸橋となっていたベーリング陸橋を越えて北米に渡り、さらに中南米まで移動した部族もいた。また太平洋の島々に移動した別のグループもいた。またさらに高地や乾燥地帯に押し込められた不幸な弱いグループもいた。

彼らの中には移動の途中で、小麦、大麦、米などの作物の原種を入手し、また豆、鶏や豚などの蛋白質を摂取できる動物を家畜化することにも成功している。そして新しい土地で、ジャガイモ、とうもろこし、トマトなどの新しい作物を入手している。この過程で、後述するような胡椒などの香辛料、コーヒー、紅茶、カカオ、ゴム、砂糖キビ、バナナ、パイナップルなどの有用熱帯作物にも遭遇した。今日では世界市場の拡大により、これら熱帯作物は大規模なプランテーション農業に発展している。また麻、綿などの繊維作物の栽培にも着手している。養蚕も地域によっては特産品として始まっている。

この移動・移住の過程で、有利な土地を取得できた力のあった部族たちが、その後の数多くの戦闘、戦争を繰り返した結果が今日の世界地図に見る状況なのである。人々が豊かさを求めて来た結果が、今日の中心（中核 core）と周辺（periphery）、中間地域に分かれた原因である。そして富の偏在、少数の豊かな人々と多数の貧しい人々の存在に繋がっている。我々は先進国で豊かな生

活をしている。他方、今日でも難民問題が世界各地で発生し、数多くの貧しい人々が奴隷状態に近いか、あるいはフェア・トレードで問題にされるような不当に安い報酬（賃金）で生活を余儀なくされている。このことを先進国の人々にはあまり知らない。しかしこの問題は看過できないことである。本論文は経済地理学的視点から中心（中核）と周辺概念を使用して、地球上の気候、地形、資源分布、植生の不平等から発生している人口分布の不平等、富の偏在などの問題に焦点をあてて行きたい。その原因の一つとしてカカオ、コーヒーなどの熱帯産の作物のフェア・トレード、環境問題に触れていきたい。

2-2. 中心と周辺 ——中心地の種類——

まず中心と周辺について論じたい。地球上における人間の分布、経済活動の分布は一様ではない。それは地表の自然条件、すなわち気候、地形、土地の肥沃度などが同一ではなく、また距離の差もあるからである。人々が多く集まり、また経済活動が多く行なわれる場所が中心地となる。中心があればその反対に周辺（辺境）がある。常に中心と周辺が存在する。地理学において「距離の恐怖」という言葉がよく使用される。これは距離が経済活動や立地に大きな影響を与えているからである。すなわち距離が離れると輸送費が増大するからである。このことは輸送が発達した今日でも当てはまる。

人間が定住できるためには食料が必要である。狩猟生活では日々の食料確保は安定していない。動物性の食物の保存は容易ではない。気候変動、人口増加、部族間の抗争などにより、食料を求めて新たに居住地を移すこともあった。現在でも狩猟生活を行なっているアマゾンなどの未開の部族でも、野生の植物の実、根などを食用に併用している場合が多い。狩猟だけでは食料不足で定住して生活できないからである。極北の地でトナカイなどを遊牧している人々や草原で羊の遊牧をしている人々、アザラシなどを狩猟するイヌイットの人々などは、今日では小麦、大麦などの食物や加工食品、必要物資を交易によって入手

して生活している。また人口の増加やより多くの収入を求めて、羊などの飼育頭数をより多く増やすと、過放牧になって草が減り草原の砂漠化が加速してしまう。このように人類の生活にはどうしても小麦、大麦、米、とうもろこしなどの穀物栽培、じゃがいもやキャッサバなどの根菜類の栽培が不可欠なのである。農業は一定の場所で継続して農耕することが必要である。そこから定住が始まる。これら小麦や大麦、とうもろこしなどの栽培には、稲作の場合と比較して見ると、種を播けば後は天水に任せて人手は殆ど要らない。収穫までの間、別の労働をすることも可能である。また収穫した穀物は輸送、保存も容易である。この点、狩猟による獲物、魚介類の場合は、特殊な輸送・保存手段を必要とする。発達した古代文明は農耕の上に成立していた。

農耕による穀物栽培によって、通商が発達し消費地である都市が成立し、また富の蓄積が可能となった。この富の蓄積によって、強大な部族、国家が成立した。文化、文明も発達し中心地が成立する。人類の歴史はこのように農耕の発達を基盤にして展開・発展してきたのである。農耕の適地は作物によって異なるが、一般的には温帯の温暖な気候で、適度の降水量に恵まれた肥沃な平野が好まれる。農業技術は温帯で発達した。ヨーロッパではフランス、ドイツ、スペインなどが中心であり、そこから離れると気温が上昇または低下したり、降水量が減少したり適地ではなくなる。最適地をまず有力な民族が占有し、その他の力の弱い民族はそこから順に押しやられて周辺部に居住し、過酷な生活を強いられてきた。そしてそこに適した作物を栽培するか、あるいは少ない収穫量で満足するか、または漁労、遊牧などの選択をしてきた。

このような農業的土地利用は、もっと狭い国内の一地域を扱ったものではあったが、農業立地論の先駆者であったチューネンによって、見事にモデル分析されている。農業の場合でも中心都市（市場）からの距離が農業活動の種類を選択する際に決定的役割を演じている。すなわち、腐敗しやすい野菜やミルクは都市（消費地）に最も近接した場所で生産され、また輸送し難い木材、薪

などの林業も中心都市に近接したその外側で行なわれていた。穀物栽培、牧畜は輸送もし易いので、さらにその外側で行なわれると言うものであった。いわゆるチューネン圏は国内の狭い範囲をモデルにしており、輸送・保存手段の発達した今日では、その形態、範囲は大きく変化していることは言うまでもない。今日の農業はグローバルなスケールの生産・流通を前提として行なわれている。

農耕には言うまでも無く、人間生活には水は必要不可欠である。多くの都市は河川に沿って立地している。交易の重要な拠点であった砂漠のオアシス都市も水が枯渇すれば消滅してしまった。ユカタン半島のマヤ文明を始め多くの文明は気候変動や自然破壊によって、食料生産の危機に遭遇し消滅してしまったと考えられている。河川は水を供給するばかりでなく、交通にも役立ってきた。そこで多くの中心都市は大河に立地している。平野の中心もあれば、交通の面を考えると、海港都市である場合も少なくない、とりわけ商業、工業が発達し、貿易が拡大してくればなお更である。

富の生産という側面から人間の経済活動を考えると、農業、漁業ばかりではない。工業が発達してくると、その原料資源である鉄鉱石、石炭、原油、銅鉱石などの産地が重要になってくる。これらの資源はある特定の場所に偏在している場合が多い。輸送が未発達の前時代には、石炭などのエネルギー資源はその産地に多くの工業を引き付けた。イギリスの黒郷などはその好例であった。輸送手段が発達した今日でもエネルギー資源、鉱物資源の輸送には莫大なコストがかかる。その一方、産油国などの資源保有国には莫大な外貨収入が入り、新たな投資などの中心地となっている。現在では資源の購入国（企業）より資源の保有国（企業）の発言力が急速に高まっており、国際間の紛争にもなっている。

鉱産資源は辺鄙な場所に産する場合が多い。そこには人々が集まり、ある程度の規模の鉱山町が一時的に形成されるが、資源が枯渇すると鉱山町は急速に

衰退してしまう。それはその場所は人間の居住に適せず、商工業の中心都市には成長していかない場合が多いからである。現在の中心都市は政治経済の中心都市や産業革命以来の工業都市である場合が多い。しかしその後、産業の主体も繊維・織物産業、重厚長大産業から自動車などの組み立て産業、電子、家電産業などにその中心が移っている。そしてそれに伴って立地も変化している。また輸送コストの低下に伴い、賃金の安い中国、タイ、ベトナム、バングラディシュ、インドなどのアジア諸国に生産の拠点を移す動きも近年顕著である。そしてそれに伴って工業の中心地の変化も見られる。グローバルエコノミーの時代になると、世界市場を相手に生産、流通、販売が行なわれている。鉱産資源の場合、金、銀、ダイヤモンドなどの単価の高いものの採取は、古い時代から特に重視されてきた。その産地も中心地ではなく、植民地などの周辺国で行なわれてきた。

現在は工業の時代から、金融・保険、証券、貿易、不動産、流通、観光、飲食、交通、通信、情報などのいわゆる第3次産業が一層発展してきた。それに伴って世界の金融の中心地として、ロンドン、ニューヨーク、東京、上海、シンガポールなどの都市が発展してきた。物の生産・消費などから目に見えない富の時代に代わってきた。インターネット、交通・通信のインフラが整備されているかが発展の鍵を握っている。これらの中心地は一般的にその国の首府である大都市で、政治・経済・文化の中心地でもある場合が多い。

このように人類の歴史と共に、その主産業の変化があり、ギリシャ、ローマ、エジプト、中国など中心勢力の変化があった。古代文明の多くは気候変動やハンチントンが提唱した「文明の衝突」などにより、消滅していったものも少なくない。本論では以下15世紀頃のいわゆる大航海時代、すなわちヨーロッパ列強（当時の中心地）と、北米、中米、南米、アジア、アフリカなどの周辺地域の衝突（接触）を見て行きたい。そしてこの接触がその後の先進国（中心地域 core）、植民地（今日の発展途上国 periphery）の枠組みに組み込まれていく

ことになる。この過程で、熱帯有用作物（特産物）の栽培の伝播を通じて、両者の国々の間の貧富の格差の拡大、人間生活の不平等などが生じた。

3. 大航海時代

——西欧列強といわゆる周辺国（地域）との接触——

ハンチントンは世界の地域を8つ程の文明圏に分類している。その文明の分類の基礎として彼は宗教を利用している。現在世界中で様々な民族が生活し、様々な国家が存在している。国家は必ずしも同一あるいは単一民族によって形成されているわけではない。複数の人種によって構成されている場合が大多数である。国境も自然的国境線ではなく、アフリカ諸国に見られるような人為的国境線よる場合が少なくない。それが国内の人種的対立、隣国との紛争の大きな原因にもなっている。言語、宗教、風俗、習慣の相違もしばしば対立の原因となる。

世界の宗教の中で、キリスト教、イスラム教、仏教、ヒンズー教の信者が多い。その伝播の過程で取り分けキリスト教の布教活動が積極的であった。キリスト教の布教がヨーロッパ内でイスラム教やユダヤ教の地域間で行なわれていた時代には、その抗争はヨーロッパ、地中海地域や中東、アフリカ北部などの地域に限られていた。しかしそれが15世紀の大航海時代に入ると、中心にいるキリスト教徒と中南米の周辺地域（当時はそれぞれの中心地域であった）に住み在来の伝統的な宗教を信仰している人々と遭遇することとなった。その結果は圧倒的な力の差によって悲劇的な場合が多かった。そしてその悲惨な影響は、500年程経った今日でも依然としてそれらの周辺諸国に強く残っている。それが低開発の根源の一つでもある。またキリスト教、イスラム教、ユダヤ教の3つの異なる宗教が、エルサレムをそれぞれ聖地としている。このような他を排除するような異なった宗教が同一の場所を聖地（中心地）とすることは争いの根源ともなっている。

大型帆船が建造され、航海術が発達して来ると、富を求めてヨーロッパから未知の新大陸への大航海時代が始まる。この時代の中心の一つは強大な海軍力を持ったイギリスであった。この強大な海軍力を背景に、イギリスはロンドンの旧グリニッチ天文台を通る子午線を0度の子午線とし、これを国際標準時の経線の基準とした。正に世界の中心であった。

富を求めて新大陸、新航路を捜す海外探検は、取り分けポルトガル、スペイン、オランダなどで盛んであった。大航海時代を世界史の区切りの一つとしているのは、ヨーロッパ諸国が単に周辺諸国を植民地として支配し、金、銀などの資源を略奪し、先住民を虐殺した事実だけではない。2010年10月に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締結国会議（COP10）では、薬品などを開発するために先進国企業が発展途上国（原産国）から過去に持ち出した民間療法に使用されていた薬草の権利まで、大航海時代にまで遡ってその利益の分け前を発展途上国側は求めているからである。今まで発展途上国の力が弱く、この問題はそれほど強く主張されて来なかったが、今日の世界の国々の貧富の格差がこの時代から暴力的に更に拡大されて来たからである。しかしこの大航海時代を通じて、世界各地の有用植物が各地に伝播し、世界の食料、食文化が豊かになったことは否定できない。

スペインでは国王のカール5世などがスポンサーとなり探検費用を支援し、新たな領土と富を求めた。そして後にコンキスタドール（征服者）と呼ばれる情け容赦のない兵士達を集めさせた。その中の一人が征服者と呼ばれた指揮官のコルテスであった。彼は多くの先住民の国を滅ぼし、財産を略奪し国土を植民地化し、先住民を殺戮し、また奴隷として資源の採掘や農産物の栽培に従事させた。この過程で多くの先住民の国家、文化が失われ、これらの地域の今日の低開発性の根源となっている。16世紀に始まる中心地域であった西欧と世界の周辺地域の悲劇的遭遇であった。あるいは今日のグローバリズムと同じような古い形態であったとも言えよう。アステカ帝国のテノチティランやインカ

帝国のクスコなどの首都は、それぞれ巨大な帝国の中心都市であった。両都市ともその後もその国の中心都市の地位を維持して来たが、より大きなヨーロッパの中心都市の中心地体系の支配下に置かれるようになった。

また当時の教会関係者たちも未開地の邪神を信じる人々にキリスト教の布教をするという大義名分で征服者・植民者たちの悪行を支援した。力によるキリスト教（カトリック）の布教は世界各地で大きな成果を収め、各地に大聖堂、教会も建設された。しかし先住民たちは土着の宗教（信仰）を完全に棄てて改宗した訳ではなく、今日でもその融合した形で現地に定着している。ヨーロッパにとって、キリスト教の布教ということが第一の目標ではなく、また貿易と言うより富、領土の収奪が真の目標であった。伝説的に伝えられていたペルーの金、ボリビアの銀、エクアドルのエメラルドなどの貴重な資源がその恰好の対象であった。

その他フランス、ベルギーなども植民地獲得に乗り出し、さらに遅れてイギリス、アメリカ、ドイツ、イタリア、日本などもこの競争に参加し、世界各地で抗争・戦争の火種になった。ロシア、中国なども隣接諸国にその支配力を及ぼすようになった。宗主国と植民地の時代となった。

高地での銀などの鉱物資源の地下での採掘は過酷なものであった。原住民を奴隷のように強制的に使役し、また死亡によってその人数が少なくなると、アフリカから新たな黒人奴隷を導入するなど、今日の常識では考えられないようなことが平気でおこなわれていた。また天然痘などの伝染病を意図的に拡散させ、その失われた労働力の穴埋めにもアフリカの黒人奴隷を新たに導入した。今日ハイチ、ドミニカの2国に分かれているイスパニョーラ島はその好例の1つで、元々の原住民とその後導入されたアフリカからの奴隷とほぼ完全に入れ替わっている。アフリカ諸国の出生率は今日でも6～7%と、世界最高水準の国々が多い。これもアフリカ諸国に今日まで悲劇を招いている一因である。自然環境の悪さと人口圧力のために豊かになれないのである。

これはヨーロッパと中南米の人々の文化・文明の差というより、すでに銃、鉄を保持した圧倒的な軍勢力、馬に恐れたインカ、アステカなどの人々の社会の未熟さが、支配・被支配という情け容赦のない関係に容易に組み込まれてしまったのだろう。対等な武器を取って抵抗するという状態ではなかった。またインカは文字を持たなかったことも致命的弱点であったと言えよう。

征服者の中にはラス・カサスなどのような心ある宣教師も居なかったわけではないが、大部分の宣教師は教会の言いなりであった。今日スペイン、ポルトガルなどのヨーロッパのカトリック教会の大聖堂、中南米のカトリック教会の大聖堂を訪れると、内部の豪華さ、取り分け黄金眩い祭壇を見れば圧倒される。黄金は神と神の国のシンボルであった。

しかし実際は教会への寄進というよりむしろ収奪であったのだ。国王ばかりでなく、教会関係者も人間の平等を説くのではなく、その利益の分け前そのものに預かっていたのである。皆欲に目の眩んだ人々ばかりであった。ボリビアのポトシ銀山は当時世界最大の銀山であって、ポルトガルの造幣局がそこに置かれるほどであった。労働者としてインカの人々ばかりでなく、アフリカから多くの黒人奴隷が導入され、彼らはそこで死んでいった。このような行為に加担したのは全てのキリスト教徒ではない。後の時代でもそうであるが、ごく一部の欲に目の眩んだ人々が兵士となり、荘園領主、商人となって悪徳行為をしたのであった。本国の大部分の人々はそのような行為も知らず、善良な信者であった。

4. 人間不平等の拡大 ——熱帯有用作物の伝播——

人間不平等の原因をして考えられることは、鉱物資源の偏在のほか、先述したような地形、気候などの自然環境の影響がある。本論では鉱物資源の偏在の問題は除いて、人間活動の一環である熱帯有用作物の生産と流通の結果生じる富の不平等の拡大の問題を論じたい。これは今日話題となっているフェア・ト

レードの考えに結びつく問題であり、また自然保護・環境問題にもつながる問題である。

ここでヨーロッパ人と熱帯有用作物との出会いを見てみたい。熱帯有用作物にはいろいろある。古くは胡椒、カカオ、コーヒー、バナナ、紅茶、ゴム、砂糖きび、パイナップル、油やしなどが挙げられる。ヨーロッパ人たちは大航海時代（発見の時代）にこれらの作物と熱帯地域で出会っている。そしてそれらの作物を苦勞して自国に持ち帰り、また植民地に植物園を作って栽培し、それらの作物の栽培技術、利用法などを研究し、その後、各植民地に移植し大規模な農園農業を展開した。そしてそこでは労働力の必要性から奴隷制がとられた場合が多い。ヨーロッパ人たちはこの時代に世界の地理的情報を集めることができたという良い一面がある。他方彼らは益々商業主義、利益至上主義の国になり、16世紀にはヨーロッパの政治・経済的強国へと発展していった。当時、彼らは永久に植民地を経営していこうと考えていたと思われる。ここでは熱帯有用作物の代表例として、カカオ、コーヒーを例として取り上げたい。

4.1. カカオ・ビジネス（歴史）

ここではまずカカオを取り上げたい。昔はカカオはメキシコでは国王しか口にすることが許されなかったという貴重な飲み物であった。カカオもこの時代に始めてヨーロッパ人に知られるようになった。彼らはカカオ豆を乾燥してヨーロッパに輸送すれば莫大な利益が得られる作物であることが分かった。カカオ豆（ココア）はチョコレートやココア飲料の原料であり、その価格は今日でも非常に高い。ちなみに2009年の国際市場での年間取引量は360万トン前後で、そのトン当たりのロンドン市場での価格（2010年7月）は約35万円であった。カカオは収穫量が少ない作物なので、豊作、不作の影響も大きく、また投資ファンドの投機資金の対象でもあって、価格はかなり大きく変動する。現在ではコートジボアール（130万トン）、ガーナ（72万トン）、インドネシア（44

万トン)、ナイジェリア、ブラジル、カメルーンなどの国が主産地である。

その栽培・収穫・輸送には多くの人手がいる。信じ難いことに、ここでもプランテーションや奴隷(特に少年)制に近い労働が今日でもアフリカの栽培地で行なわれている。フェア・トレードの対象となるべき生産、流通、消費の姿が見られる。今日になってもここでも労働が不当に搾取されているのである。

胡椒、紅茶、コーヒー、ゴム、バナナ、パイナップル、マンゴー、砂糖きびなどの作物は温帯で栽培される作物ではなく、熱帯で発見され栽培されて来た作物である。つまりヨーロッパの中心地ではなく遠方の周辺地で栽培されていることが著しい特徴である。茶はインド、スリランカなどの熱帯地方ばかりではなく、中国、日本などの温帯地方でも広く栽培されている。綿花もインドだけでなく、もっと広く乾燥した世界各地でも栽培されている。

ヨーロッパの豊かな消費者はこれら作物の生産地・生産者のことを全く知らないのである。つまり最終製品を高価に販売し利益を得るために、先進国の最終製品生産者は有名ブランドを確立し、プランテーションなどで直接生産者には僅かの報酬しか支払わないという生産・流通・販売のパターンが出来上がったのである。現在ではマーケティングや広告宣伝の手法が発達し、最終製品の生産・販売業者の力の方が零細な個々の生産者より圧倒的に力が強い。

イギリスやオランダなどは、植民地の建設と共にこれら熱帯の有用植物の研究に熱心であった。例えばロンドンのキュー植物園では、世界各地から蒐集された熱帯植物が当時最先端の大温室の中で栽培され、その栽培、利用方法などが研究されてきた。観賞目的ではない。また同園には世界中の杉の木が栽培されている。さらにロンドンには世界中の野菜を栽培している小さな植物園もあり、日本の野菜もあった。そこには単に熱帯地方を植民地にして搾取するだけでなく、そこからより科学的に効率よく長期的に富を得ていこうとしていた姿勢が強く伺える。オランダも同様であった。シーボルトの来訪なども、医療目的だけでなく、短期的な富の搾取とは別の日本を調査しようとする強い関心・

行動があった。資金もかなりオランダ政府から援助を受けていたのだろう。

時代はかなり後の1854年になるが、アメリカのペリー艦隊が横浜来航時にも、ペリーはアメリカの野菜種子、農機具を土産として持参した。当時のアメリカは一大農業国家であった。そして日本からは、外界と交配されてこなかった環境にあった野菜などの種子を本国に持ち帰っている。その種子は遺伝子の系統保存のため、今日でもハーバート大学ニューヨーク植物園で栽培が続けられているという。日本と欧米先進国との科学に対する姿勢・伝統の差を強く感じる話である。熱帯作物の伝統的栽培方法では、品種改良、品質の安定、大量生産は覚束ない。そこで今日では勢い世界の消費市場を握っている欧米の巨大アグリビジネスの経営するプランテーションが生産の主体となっている。

4.2. カカオ・ビジネス（栽培）

カカオは先述したように、古くは王様しか食することが許されない「神々の食べ物」と呼ばれ、メキシコを中心とする地域で、古くはオルメカ人によって、その後はマヤ人、アステカ人によって栽培されてきたと言われている作物であった。カカオは高価な飲料としてばかりでなく、その実は通貨としても使用された貴重なものであったという。カカオの木は高温・多湿の気候を好む作物で、中米からメキシコ南部の熱帯雨林地帯にのみその分布は限られていた。16世紀後半には旧大陸と新大陸の貿易の中でカカオは重要な地位を占めていた。当時の貿易の大部分をスペインが独占し、スペインに持ち込まれたカカオは修道院で修道士たちによってチョコレートに加工された。そしてワインやビール、チーズ、バターなどと並ぶ修道院の重要な生産物となった。修道院でチョコレートの製法の秘密が保持されたので、17世紀初め頃までスペインがチョコレートの生産を独占してきた。

当時チョコレートには薬効があると信じられ、その需要は増大した。需要の増大に伴いスペイン人たちはメキシコ、グアテマラ、バリーズなどの植民地で

カカオ農園（プランテーション）を拡大し、先住民達は奴隷状態で働かされた。先住民の人口が過酷な労働、虐殺、疾病などによって減少すると、アフリカから新たな黒人奴隷が植民地に送り込まれた。遠く離れた植民地でのこのような悲惨な状況は、本国のスペイン王室の緩やかな改善勧告では何の効果もなかった。その後カカオの木に病気が発生し、カカオの栽培は1970～80年代には西アフリカの黄金海岸（ガーナ）に持ち込まれ、その後コートジボアールの熱帯雨林地帯に生産の中心が移った。今日ではコートジボアールが世界生産の約半分を占めている。ヨーロッパの知識人の間に広まった啓蒙思想も万人に行き渡るべきものであったが、植民地の砂糖きび、綿花、カカオなどの生産に直接従事した人々は除かれていた。悲惨な労働環境が今日まで続いてきた。

カカオの生産はカカオの木から20cmほどの楕円形の実を切り落とし、その実を天日に曝して発酵させて腐らせ、その中にある数十個のアーモンドのような実を乾燥させて収穫する。収穫期には発酵・乾燥作業も重なり、短期間にこれらの作業を行わないと、収穫したカカオ豆の品質に大きな影響を与えるので、多くの労働力を必要とする過酷な作業である。カカオの木自体は背の高いバナナ、椰子、マンゴーの熱帯雨林の木に守られて栽培されている。収穫された乾燥したカカオの実は麻袋に入れられて集められ、コートジボアールのアビジャン港に運ばれ海外に輸出されている。

現在、コートジボアールの国内は内戦状態で治安が悪く、カカオ栽培農家はカカオアを売ったお金から米と油などを買うと、手元には現金は殆ど残らない。ましてそこに働く労働者の賃金は最低で、鞭を打たれて働かされている少年労働に依存している奴隷状態に近いものである。中には拉致されてきた少年もいるという。カカオから作られるチョコレートなどの高価な甘い夢のような菓子世界からは想像できない地獄のような世界であって、決して楽園ではない。

今日でも世界の中心（中核）に生活している富裕な人々には、世界の周辺に

住む人々のこのような生活振りは全く知らされていない。また逆にカカオ生産に従事している少年たちは美味しいチョコレートを見たことも味わったこともない。これが貧富の格差の現実である。このことは先進国、発展途上国の人々が、それぞれ中心 (core) と周辺 (periphery) に分かれて居住し、お互いに日々顔を見合わせて生活していないからである。顔を見合わせて生活していれば、そのような不平等は容認しないだろう。そこに世界の不幸がある。中心と周辺が生じてしまうことは避けられないことなのだ。我々はそれを是正していく努力をしていかねばならない。

カカオの加工品であるチョコレート、ココアは欧米などの大資本が支配している。また高価な夢のような高級菓子を作る小さな菓子店もまた多数存在している。

19世紀になって欧米に大手製菓メーカーが台頭して来る。オランダのバンホーテン、フランスのフライ、イギリスのキャドバリ、アメリカのハーシーなどがそれである。これらの創業者は新しいチョコレートの生産方法を開発し、販売し成功した。これらの創業者には、宗教的に圧迫されたクエーカー教徒であったことが多い。彼らは熱心なキリスト教徒であり、社会福祉や従業員福祉などに熱心であった。ハーシーは従業員のために菓子工場を中心に、福祉の整った工場町まで建設している。丁度イギリスの社会事業家のロバート・オウーエンが理想の織物工場村を大都市グラスゴーから離れた場所に建設し、大都市の持つ貧困や不衛生、疾病などを逃れようとしたことに似ている。ここでは健康で快適な状況で働き、生活し、教育や医療も受けられる場所であった。キャドバリ社も同様に従業員のための田園都市を建設している。日本でも森永製菓を創業した森永太郎が欧米視察の後、同様な夢を抱いていた。

奴隷制は公式には19世紀には廃止されている。クエーカー教徒のチョコレート企業の経営者たちは勿論奴隷制に反対していた。自分たちの目が届く範囲内では従業員たちの福祉を考えていた良き経営者たちであった。しかし自分たち

の目が届かない辺境のカカオの栽培・生産現場で何が行なわれていたのを充分理解していなかった。その後のジャーナリストたちの根気強い告発によって、やっと奴隷制と今日の「年季勤務」制も実態はそれほど変わっていないことを認めざるを得なくなっている。カカオの生産の背後には今日までこのような悲惨な状況が継続してきたのである。つまり如何に安く直接生産者たちを働かせるか、そのことばかりが問題であった。奴隷制などは欧米人と人種が異なっていたこともその大きな理由の一つであった。アメリカ南部の綿作地帯の黒人奴隷制は、人種は異なっている、同じ国内地域で行なわれていたため、早くからその反対運動が起きて来たと言えよう。綿摘み機の発明により、その後黒人奴隷の労働力は不要になったのである。

カカオ生産の場合は、機械化も困難で、人目に付かなかったため、奴隷制に近い状態が今日まで継続されてきた稀な事例である。

5. コーヒー・ビジネス

コーヒーは今日アメリカ、ヨーロッパ、日本などの先進国で、日常広く愛飲されている飲料である。その消費量は紅茶、緑茶を上回る。主要な輸入（消費国）はアメリカ（126万トン）、ブラジル（第2位の消費国）、ドイツ（94.6万トン）、イタリア（42.4万トン）、日本（41.8万トン）、フランス（29.5万トン）、スペイン、イギリスなどである。ブラジルを除けば全て先進国である。この中に中国、インド、バングラデシュのような貧しい大人口国はまだ主要消費国として登場していない。他方、主要生産国はブラジル（217.8万トン）、ベトナム（106万トン）、コロンビア（71万トン）、インドネシア（66.6万トン）、エチオピア（32.6万トン）、メキシコ（32万トン）、インド（27.5万トン）、ペルー、グアテマラなどである。中南米、アジア、アフリカ諸国などの熱帯地方で広く栽培されていることに注目される。これは先述したようなプロセスで先進国から移植されたコーヒーの代表的品種アラビカ種が植民地で広く栽培されている一

方、ベトナムなどではインスタント・コーヒー用の安価なロブスタ種のコーヒーの木が栽培されているからである。気候風土の違いも大きい。

コーヒーの生産・加工・販売の場合もカカオの場合に非常に似たところもあるが、違いの方が大きいと言える。それはコーヒーの主要品種はアラビカ種で、それに続いてロブスタ種が栽培され、ごく僅かのリベルカ種も栽培されている。産出地（国）の違いによって、レギュラーコーヒーに使用されている豆には60種ほどの産地ブランドがあると言われている。この産地の違いによって、同じアラビカ種でも酸味、香り、苦味、甘み、コクなどが微妙に異なる。それが一般的なブラジル・コーヒーと最高級品といわれるジャマイカ産のブルマウンテンとは、10倍程の価格差の違いとなって現れている。インスタント・コーヒーなどに主に使用されているベトナム産のロブスタ種のコーヒーの価格は遥かに安いものとなっている。

コーヒーの代表的種類のアラビカコーヒーは、エチオピアの海拔1500mほどの高地が原産地と考えられている。コーヒーの今のような飲用の仕方は、15世紀ごろペルシャで確立されたと言われている。その後ヨーロッパの人々に広く愛飲されるようになった。初期にはコーヒーは貴重な熱帯作物で、アラビアではその国外持ち出しを固く禁止していた。当時の主産地のイエメンの輸出港のモカでは、コーヒー豆に熱湯をかけて発芽できないようにして輸出したという話が伝えられている。当時は飲酒が禁止されていたイスラム社会で飲用されていた。その後もコーヒーは貴重な飲料だったため、ヨーロッパ各国はその植民地で栽培するためにコーヒー豆や木を密かに持ち出す非常な努力をした。

コーヒーはその後16世紀に密かにインドに伝えられ、17世紀末にはオランダは積極的にセイロン（スリランカ）、ジャワ、スマトラ、チモールなど世界各地に移植し栽培を始めた。さらにジャマイカ、メキシコに移植された。1774年にはベルギー人によってブラジルにも移植された。ブラジルは19世紀初頭には世界の大産地として発展し、今日に至っている。またアフリカ各地にも移植さ

れた。いずれの場合にも自国に持ち帰った貴重な苗を植物園で大事に育て、そこから世界各地の植民地に移植している。イギリス人もアフリカ各地や台湾などに導入した。またスペイン人はフィリピンやマレー半島に導入している。このように嗜好品としてのコーヒーは世界各地の熱帯地方に広く導入された稀有の作物である。それは乾燥したコーヒー豆は輸送し易く、また高価で取引される僻地の有利な換金作物であるからである。特に高地で栽培されるコーヒーは、その輸送上の理由からも熱帯各地の高地での栽培に適した作物であった。それが世界各地で栽培されるようになった理由である。コカや芥子（アヘン）、大麻などの麻薬は闇の世界で高価に取引されているが、その栽培は非合法であって論外である。タイ国境の僻地である黄金の三角地帯における山岳民族による芥子栽培も、それに代わる有利な換金作物が見つからない現状では完全に禁止することは困難である。

黒い液体であるコーヒーの飲用はなかなかヨーロッパで普及しなかった。コーヒーには様々な薬効があるとも宣伝された。一部の人々にのみ飲用されていたコーヒーは、1652年にロンドンにコーヒー・ハウスが開店し、そこにビジネス・マンたちが集まり、情報交換の場所として利用したことから、イギリスではコーヒー・ハウスは爆発的に増加した。しかしその後紅茶にその座が取って代わられた。フランスでは1670年代にカフェーが開店し、多くの人々に利用された。ウィーンでは、1683年にトルコ軍がウィーン包圍後敗退し撤退すると、残されたものの中に大量のコーヒーがあり、それを契機にコーヒーを飲用するようになったという話が伝えられている。いずれの国でも一般の人々が今日の先進国の人々が気軽にコーヒーを飲めるような価格ではなかった。

コーヒーの木は樹高6～7mに達するが、一般的には2m前後の高さで栽培されている。コーヒー栽培の適地は種類によって若干異なるが、海拔1500m前後の高地で、気温は一年中18～22℃、年間降雨量は200～1500mmの場所が最適地といわれ、それほど多くの降水量を必要としていない。そこで熱帯のかな

り広い地方で栽培可能である。また日除けや防風のため背の高い樹木を周りに植える必要がある。

コーヒー栽培でもっとも人手を要するのは収穫時である。機械による収穫は木を痛め、傾斜地では危険なので殆ど機械化されていない。大部分手摘みである。収穫した12mmほどの実から中のコーヒー豆を取り出す作業はデリケートである。この作業には実を直接日光で乾燥させる方法と、水に浸けて発酵させる方法の二通りの方法がある。いずれの場合も完全に完熟した実を処理する必要がある。その収穫日はわずか一日しかないという。つまりこの時期に大量の労働力を必要としている。

それではコーヒーの木の生産現場どうなっているだろうか。ブラジルにコーヒーの木が導入された19世紀初期には黒人奴隷も導入された。しかしその後19世紀末に奴隷制が廃止されると、白人の入植も始まった。日本からも1908年に笠戸丸に乗った第1回の移民がブラジルに渡った。彼らは豊かな未来の話を信じた貧しい農民達であった。彼らは厳しい環境の下、コーヒー農場で酷使された。しかし厳しい環境にも耐え、成功した人々も少なくない。今日のブラジルの日系社会の基礎は彼らの努力の賜物である。彼らの過酷な生活はコーヒー農園の生活を物語っている。改善されて来たとは言え、今日の大規模コーヒー・プランテーションの労働実態は似たようなものである。

ここでは生産現場の一例としてメキシコの例を挙げたい。近年のヨーロッパ市場で受け入れられて行くためには、従来の化学肥料、化学薬品を大量に使用し、1ヘクタールに1万本のコーヒーの木を密植する方法では、短期的には確かに収穫量が増大するが長続きしない。コーヒーの場合でも現在有機無農薬栽培が推奨されている。有機栽培は周りの樹木を残してコーヒーの幼木を保護し、1ヘクタールに1000～2000本のコーヒーの木しか植えず、コンポストによる有機肥料のみを使用する方法である。この方法を採用すれば短期的には収穫量が減収となるが、長期的に収穫量が増大し、コーヒー豆の安全性が確保され、

また栽培農民達や家族達の健康被害も防げる。そして化学肥料の購入経費が無くなり、収穫量は倍増するという。またコーヒー豆の品質の向上も国際市場で高価に販売していくためには不可欠の条件である。

収穫は年に3回、一家総出で早朝から深夜まで行なう。完熟後、短時間にコーヒーの実を処理しないと品質に重大な影響を与えてしまう。重労働である。メキシコのコーヒー栽培農家にとって最大の問題の一つは流通である。山間部の農民たちは処によって交通手段を全く持っていない。その場合、収穫したコーヒー豆はコヨーテと呼ばれる仲買人によって一方的な価格で取引される。農民たちはその金で砂糖や道具類、セメントなどを彼らから購入する。農民達は自分の収穫したコーヒーの品質も国際価格も知らされておらず、仲買人たちの一方的な言い分に長い間従ってきた。コーヒーのプランテーションができると、原住民達は土地を取り上げられ、自家用の食料生産もままならない貧困状態になる。ここに農民たちの貧困の原因がある。それは大航海時代に始まり、その後数百年に亘って継続されて来たものである。大量消費社会になり、グローバル化が進み、巨大企業が出現してくると状況はさらに悪化した。莫大な利益をあげている大手食品（コーヒー）メーカーが成長している一方、多くの無知な資本のない農民たちが引き続いて貧困な状態に置かれているのである。

6. フェア・トレードへの道

カカオ以外の熱帯のプランテーションで栽培されているバナナやパイナップルなども低賃銀労働力に依存している。カカオ栽培やコーヒー栽培も先述したように低賃銀労働者に依存してきた。マレーシアなどのゴム園でもマレー人で無く、導入されたインド人の労働力に依存してきた。紅茶の栽培もインドやスリランカなどの低賃金労働者に依存している。スリランカ（セイロン）では、紅茶農園に南インドからタミル人を移住させ、過酷な労働に従事させた。この時代、熱帯有用作物が熱帯各地に導入されると同時に、人間（とりわけ黒人）

の強制移住も世界各地で見られた。今日、世界地図帳で各国の人種構成を見ると、南米各国では黒人と原住民の混血、原住民、白人と黒人の混血、白人と原住民の混血など、実に様々なパターンが見られる。またその構成比も国によって異なる。アジアでも強制、自発的移住があり、彼らが融合することなく独自の文化を持った集団として今日でも生活していると、国内の人種間、宗教間の紛争になっている場合が多い。大航海時代は今日までその影響が続く世界史のターニング・ポイントである。

温帯地方の緑茶の生産は日本などでは機械化も進み、もっとまじな賃金が支払われている。綿の収穫も現地の労働力の他、出稼ぎ労働者に依存している国も多い。農作物の収穫は季節性のある一時期の場合が多いので、勢い出稼ぎ労働者に依存している場合が多い。スペインのオリーブの収穫時にもアフリカから出稼ぎ労働者が来ている。一日当りの賃金がどの程度以下であれば問題なのかは国や地域によって異なる。トルコでもクルド人の家族が農園に出稼ぎに来て、テント生活をしていた。

しかし一日の一人当たりの収入が1ドル以下であれば最低生活をしていくことも覚束無い。発展途上国では家族が多く、子供たちが僅かのお金を稼いで家計を助けて場合も多い。教育も受けられないので貧困から脱出する術もない。シエラレオネでは大人も子供も一日中砂を選別してダイヤモンドを捜している。一日働いて、良くて1ドルという。稀に良いダイヤモンドが見つかったとしても仲買人に騙し取られてしまう。それがニューヨークの高級宝飾店では何千、何万ドルの価格となって売られている。シラレオネ政府は実態を把握していても、黙認して何もしない。彼らもこのビジネスの恩恵にあずかっているのである。その結果、子供たちは学校にもいけない。この国では学校に就いて社会的に上昇していける道も閉ざされている。ここにフェア・トレードの考えの根柢がある。人間の労働が不当に差別されず、人種、性別、年齢を越えて、正当に評価されねばならないのである。社会的正義である。

バナナ栽培にも問題が多い。チキータ、デルモンテ、ドール、バナンボ（住友商事系）などの大手数社の寡占的狀態で世界市場に出荷されている。消費者はこのブランド名に拘らず、ヒイリピン、エクアドルなどの産地名を見るだけである。バナナが日本市場で人気のあるのはその手軽さと価格の安さである。近年、フィリピンのミンダナオ島のバナナ農園から大手バナナ流通業者への出荷価格の改定や国連による多国籍企業（大手バナナ流通業者）の活動規制の強化が見られる。また近年このバナナにもフェア・トレードの動きがある。それはバナナは“菓漬けの果物”といわれるように、大量の殺菌剤、殺虫剤が散布され、農民に癌や不妊症などの被害が出ているからである。しかしこのバナナの事例も流通が非常に複雑であって、ここで取り上げるには紙数の余裕がない。詳しくは鶴見良行（1982）、中村洋子（2006）などの分献を参照されたい。

6-1. フェア・トレード ——コーヒーの事例——

ここにフェア・トレード（fair trade 公正貿易）の考えを持ち込もうとするグループが現れた。オランダ人のフランツ・ヴァンデル・ホフ神父とニコ・ローツェンなどによる「マックス・ハベラー」という組織の設立であった。すなわちコーヒー農家を資金援助や直接支援をしていくのではなく、かれらの生産したコーヒーを国際市場において適正価格で販売し、消費者にもっと購入して貰おうと言う組織作りであった。具体的には仲買人が介入することを止め、彼ら自身の販売ルートを確認することであった。また有機栽培の認証制度を確立し、品質保証をしていこうとするものであった。コーヒー業界にはネスルなどの大手メーカーが存在し、新たな流通ルートを確認していくことは大変困難であった。ヨーロッパでは現在まだ僅かな小売チェーンでしか販売されておらず、あとはこの問題に関心のある消費者しか購入していない。価格がまだ少し高価であるからである。消費者全員がスーパーなどで気軽に購入して貰えることがこの運動の最終目標である。

また最大の問題は、果たしてこのフェア・トレードで販売されたコーヒーの価格から、より大きな部分が中間で搾取されることなく、実際に最終の直接生産者の手に渡るかということである。そうなればコーヒー農民達の誇りを失わず、自分たちで自立していく道が開けてくる。開発援助の理想的姿の一つとなる。われわれが支払う金額はそんなに多くない僅かな金額でよい。中間で搾取している人々を取り除き、仕組み、規制を変えていくことである。我々が日常愛飲しているコーヒーの彼方にも人間不平等の現実が存在している。コーヒー生産の場合は世界各地で行なわれているので、全てがここに紹介したようなメキシコの例と同じわけではない。しかし白人以外の他民族を使ったプランテーション農業では、その差はあっても過酷な低賃金労働に依存していることに変わりはない。ネスレ、ゼネラル・フーズなどの大手メーカーが市場をコントロールしているのである。

日本でも焙煎業者の中にこのようなフェア・トレードの考えに目覚めた人も現れて来た。その一人はコーヒー豆の仕入れでブラジルなどの産地を視察する中でこの考えに出会った。彼が実際取り組んだのはスリランカである。スリランカはかつてセイロンと呼ばれた時代に、イギリスによってコーヒーの木が導入され、世界的な大産地となった。しかしその後さび病の蔓延によって、コーヒー栽培は壊滅的打撃を受け、紅茶の栽培に転換し、今日では紅茶の世界的産地となっている。彼はこの国のコーヒー栽培が完全に消滅してしまったのかを確かめるため現地調査に行き、高地でロブスタ種、さらに1000m以上の高地でアラビカ種も僅かに残って栽培されていることに出会った。そしてJICAの協力も得て、この高地の貧しい農民たちを指導して何とか世界市場に出せるアラビカ種のコーヒー豆の生産に成功した。このコーヒー豆を日本市場とりわけ自己の店で輸入していくには幾多の困難があった。これはこのようなフェア・トレードを考えていく上で大変参考になる話である。以下述べて見たい。

6-2. フェア・トレードは果たして貧困問題を解決できるか

今日発展途上国と呼ばれている国々は、かつては低開発国とも呼ばれていた。またその地球上の分布から、北の先進国、南の低開発国ということから、南北問題といわれて来た。そして多くの研究がなされ、開発論はブームですらあった。当然、国際社会でも多くの支援活動が行なわれてきた。このような努力にも拘わらず、現実には貧富の差、発展の格差は解消されていない。果たしてフェア・トレードという活動がこの問題の解決の一手法になりうるのか、コーヒー・ビジネスの事例で見てみたい。

まず生産者側の事情である。コーヒーの木は植えてから、収穫できるまで3～5年掛かる。その間農民達は無収入であり、生活をどう支えていくかの課題がある。またコーヒーの木は霜などの自然災害によって、収穫量が大きく変動する。当然国際価格の変動の影響も受ける。つまり農民たちがコーヒー栽培を始め、安定した生活を実現していけるためには長期の購入契約が不可欠である。それもある程度纏まった量である。また機械・器具などの購入のための長期の資金援助、栽培・乾燥などの技術指導、販売のノウハウも必要である。これは特に国際市場ではコーヒー豆の品質管理が強く求められているからである。食の安全・安心は重要である。そうでないと安く買ったたかれるか、全く商品にならない。これらのことは高地に住み外界との接触が少ない農民達たちは分からない。自分たちの力だけでは不可能である。購入業者、現地政府や行政機関、民間企業、あるいは農業専門家、ボランティアなどの支援が必要である。しかしより重要なことは生産者側の自立的努力である。大航海時代以降、いわゆる発展途上国の地位になってしまった国々は、資金もない、学問、技術もない状態に置かれてしまった。彼らがこの状況から脱却するには教育しかない。先進国のフェア・トレード団体の力に依存しているだけでなく、自分達で対等に出荷できる技術、体制を確立していく必要がある。グラミン銀行などの手法の導入も必要であろう。

他方、購入側の課題は何であろうか。現在、コーヒーの流通はゼネラル・フーズなどの一握りの大手多国籍企業によってコントロールされている。フェア・トレード業者はその隙間のニッチ市場に参入していく訳である。そのためにはある程度の販売力を持っていなければならない。生産者側に長期のある量の買取り保障をしていくためには、ある程度の自己資金を持って販売を続けていかねばならない。お互いに長期契約の信頼関係の上に立ったビジネスである。最終の買い手はコーヒー店か個人消費者である。一般的にフェア・トレードによるコーヒー豆は価格が高い。貧しいコーヒー栽培農民を助けようという心をもった善意の消費者に依存したビジネスであるところが大きな課題である。最終的な目標はスーパーなどで安価で販売されて、消費者が気軽に買っていくことである。前出のオランダの事例では、すでにヨーロッパのスーパーの中で、このフェア・トレードのコーヒーを取り扱っているところも現れている。日本より一歩も二歩も進んでいるようだ。

日本でこれを成功させていくには、個人の力だけでなく、生協、大手スーパー・チェーンなどを巻き込んでいくが必要である。またドトール・コーヒー（1450店）、スターバックス・コーヒー（850店）、UCCグループ（650店）などのコーヒー専門店とマクドナルド（2800店）などのハンバーガー・チェーンなどのコーヒーをお客に提供している業者にも、低価格のコーヒー豆だけでなく、このようなコーヒー豆の使用を促していく努力も必要である。

日本人の中にも国際感覚のある若者、中高年達はいくらもいる。しかしコーヒーが飲まれているのは大都会である。地方では少ない。日本人は感性が鋭い。オランダに長年駐在した人は、現地の喫茶店で飲み物の区分が紅茶またはコーヒーの二通りだけで、日本の喫茶店では、コーヒーがブルーマウンテン、モカ、コナなどとメニューに何種類も細分化されて表示されているのに驚いていた。また早稲田の国際部に留学したアメリカの学生が、日本のホームステイ先で出されたコーヒーの美味しさに驚きの声を上げたと言う。それは市販の普通のイ

インスタント・コーヒーであったという。この笑い話のような話にあるように、一般のアメリカ人がお茶代わりに飲んでいるアメリカン・コーヒーは実に美味しくなくない。シアトルに1号店を出したスターバックス・コーヒー店がアメリカに入ってきて来ると、アメリカ人の中には日曜日に、車で自分のマグ・カップを持参してこの店にコーヒーを飲みに行く人も現れたという。

日本市場で成功していくにはとりわけ品質に拘る必要がある。ブルーマウンテンとまではいかなくとも、やはり高品質の伝説的あるいは夢のあるコーヒーが望まれる。限界生産者を助けるというのではビジネスは長続きしない。コーヒーはチョコレートとは異なって、喫茶店で飲むことに意義がある。家庭でなく、また職場でなく、第3の空間として友人、仕事相手の会話の場として、コーヒー・ハウスがある。その情景はスターバックスの店を見れば用意に理解できる。かつて名曲喫茶や読書、会話の場、癒しの場として喫茶店があった。新しい文化を創出する知的な空間であった。今日のコーヒー・ハウスでもそれは同じである。日本の地方の町でかつてスターバックスの店が出店していないので、誘致活動を始めた町があるとニュースになったことがある。トルコでも男性たちがコミュニケーションの場として喫茶店に一日中たむろしており、イタリアでもパール、喫茶店がある。それだけコーヒーは魅力的な飲み物である。

インスタント・コーヒーは日本人の発明だという。また缶コーヒーも日本人の発明で、市場に氾濫している。日本人は家庭では緑茶を飲み、時には紅茶、コーヒーも飲む。町には自動販売機が多数あり、各種の飲料が販売されている。その多くはペットボトル入りである。大都会では天然水を買うのも当たり前になって来た。大変な市場である。一つのものに統一されないのが、日本人の特性かも知れない。アメリカではコココーラとコーヒーは競合した飲み物であるが、飲む場所、機会が異なっているように思われる。

一杯のコーヒーの原価に占めるコーヒー豆の価格は微々たるものである。コーヒー店で我々お客は席料あるいは店の利用（時間）料として店にお金を

払っているのである。フェア・トレードでコーヒー豆にもう少し余分のお金を支払う余地は十分にある。またそのような気持ちを持っている人も多い。課題は如何にして末端のコーヒー栽培農民にまでお金が届くかということである。かれらもお金を直接支援で貰いたくなく、正当な価格でかれらの生産物が買収されることを望んでいるのである。それがフェア・トレードなのである。ある意味では国際的大企業への挑戦である。今大手のコーヒーチェーンでも、ナチュラル・コーヒーあるいはスペシャルティ・コーヒーなど、より上質のコーヒーを提供する動きがある。他方、一般家庭、一般人ではやはり低価格に流れる人も多いのが現実である。

最近マクドナルドが本格的にコーヒー市場に参入するというニュースが流れた。価格を据え置いて、ドトールコーヒー、スターバックスコーヒー、UCCグループなどのコーヒー専門店から客を奪おうという戦略である。マクドナルドは2800店ほどある。価格競争が始まるとフェア・トレードコーヒーに与える影響は大きい。日本には中堅の焙煎メーカーが300社ほどあるという。彼らを旨く取り込めるかも課題である。

さらに大きな問題は国際的な投資ファンド（マネー）が、金融商品、金融派生商品から原油、金、銀などの商品相場に流れ込んでいることである。これらの巨大な投資マネーはさらに小麦、とうもろこし、砂糖の先物相場にも流れ込んでおり、2010年4月～12月にはこれらの相場を60～70%上げているという。コーヒーの先物相場（ニューヨーク）も52%上昇している。これは新興国で需要が増大していることや、天候不順だけでは説明できない。そこにつけ入る投資マネーの影がある。彼らはお金さえ儲かれば何でもやる人々だ。その膨大な資金は世界経済を混乱させている。カカオ豆もコートジボワールの収穫減少のうわさに価格が上昇している。ブラジルではバイオエタノールの生産のため、コーヒーから砂糖きびに切り替えた農園もあり、コーヒー生産が減少するという噂もある。バイオ燃料の原料にとまろこしや砂糖きびのような食料を使用す

ることは止めるべきである。このようにフェア・トレードを推進するグループがいる一方、相変わらずお金に飢えた人々が依然として強大な力（資金）持っているのである。グローバリズムはアメリカと力のある多国籍企業にとって有利な考えである。フェア・トレードなどという耳に優しい考え方だけでは、人類の不平等は解消されない。アメリカ、中国などの大国と巨大なグローバル企業、投資ファンドなどの姿勢が変わらない限りは、世界の公正は実現されないだろう。中心と周辺に分かれてしまっている世界の現状もその大きな原因の一つである。世界の貧困問題、環境問題、食料問題の解決には人口問題を抜きに論議できない。しかし皆この事実が分かっているながら、世界人口は増加するのを止めるべきであるとは怖くて発言できない。人口問題、人口政策は各国の最重要問題であって、どの国でも他国の批判ができないでいる。人間の労働が世界中で平等で正当に評価される社会、すなわち社会的正義が実現される日が一日も早く到来することを祈りたい。

主要参考・引用文献

- (1) P.L.Knox & S.A.Marston “Places and Regions in Global Context — Human Geography” Prentice Hall 1998
- (2) 農林省熱帯農業研修センター『熱帯の有用作物』農林統計協会 1975年
- (3) 白井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る』中公新書No.1095 1992年
- (4) サミュエル・ハンチントン 鈴木主税訳『文明の衝突』集英社 1998年
- (5) ジャレド・ダイヤモンド 倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄』（上・下）草思社 2000年
- (6) デイヴィッド・ランサム 市橋秀夫訳『フェア・トレードとは何か』青土社 2004年
- (7) ジャレド・ダイヤモンド 榎井浩一訳『文明崩壊』（上・下）草思社 2005年
- (8) ニコ・ローツェン、フランツ・ヴァン・デル・ホフ 永田千奈訳『フェアトレードの冒険』日経BP 2007年
- (9) キャロル・オフ 北村陽子訳『チョコレートの真実』英治出版 2007年
- (10) 小澤卓也『コーヒーのグローバル・ヒストリー』ミネルヴァ書房 2010年
- (11) 清田和之『コーヒーを通して見たフェアトレード』書肆侃侃房 2010年
- (12) 鶴見良行『バナナと日本人』岩波新書 1982年
- (13) 中村洋子『フィリピンバナナのその後』七つ森書館 2006年